

セミナー；鈴木貞美「日本の『文学』概念再び—日本文芸史の再編に向けて」

6/8/14:00 - 16:00 神保町・東京堂書店の前のビル、6F

前近代において「文学」は漢詩文、ないし藩校の儒者を指し、和歌も物語も「文学」と呼ばれたことは一度もない。「日本文学」は、自国語の思想によってつくられた西洋近代の「文学」概念を受容した明治の新概念だが、漢文を入れるか、どうか、諸宗教をふくむ日本的「人文学」か、感情表現主体の「美文学 純文学」か、四つの選択肢の前に立たされ、今日でもおぼつかない。さらに「歴史物語」「説話」「日記文学」「随筆」など新しい下位概念が次つぎにつくられ、西洋近代が生んだ「私小説」が日本の古代からの伝統、表現形態のちがう『枕草子』『方丈記』『徒然草』が「日本の三大随筆」と横並びにされるなど混乱の極みも生じた。漢文と漢文書き下し、和文、和漢混交文、口語の、二言語と日本語四文体様式を近代以前から流通させてきたことは国際的に稀な事態であり、その中で育まれたジャンル概念を改めて問うところから日本文芸史の再編は始まる。